

漢書地理誌通黃支國考

藤田元春

漢書地理誌に出てゐる印度への航路は左の如くである。地名のすべてが、今日の地名からかけはなれてゐるので確定的に斷言はできない。大方はかうであらうかと思はれる限りを、解説することにする。この點讀者の諒承を乞ふ。

自_三日南障塞徐聞合浦、船行可五月、有_三都元國。又船行四月有_三邑盧沒國。又船行可二十餘日有_三諶離國。師古曰諶音士林反。

步行可十餘日、有_三夫甘都盧國。師古曰都盧國人勁捷善緣_レ高、故張衡西京賦云、鳥獲扛_レ鼎。都盧尋_レ攬。又曰非_三都盧之輕趨_一孰能超而究_レ升也夫音扶。自_三夫甘都盧國、船行可二月餘、

有_三黃支國、民俗略與朱崖相類、其州廣大戶口多。多_三異物、自武帝以來皆獻見。(中略)平帝元始中王莽轉_レ政欲_レ耀_三

威德、厚遣_三黃支國_一令_三遣_三使獻_三生犀牛_一。自_三黃支_一船行可八月。到_三皮宗_一。船行可二月_三至_三日南象林界_一云。黃支之

南有_三已程不國_一漢之譯使自_レ此還矣。

漢時の邊境の道里は、所によつて過大に記される。例令ば有名な魏略の韓倭の道里が、今の日本里の四十倍で、漢時の里數の二倍に記されてゐるやうな場合もあるのだから、この邊境への航程の如き、確實性のない場合が多い。最初に來た船、もしくは最初に記録された船行が五ヶ月といへば五月航行としるし八月といへば八月航程といふ工合に記されたものらしい。唐時賈耽の道里記に至つては、一々入國の人に尋ねたから道里もやうやく正確になつた。それ

でも帆船時代のことだから、航程自から延びざるを得なかつた、故にこゝではこの五月とか二月航行とかいふ文字には無關係に地名の考説を致しておくことにする。

日南 漢書地理誌に故秦の象郡、武帝元鼎六年(西紀前一二)開、更名とある所で郡治は朱吾にあつた、本紀によるとこの年西南夷平定即ち越地を、南海、蒼梧、鬱林、合浦、交趾、九真、日南、珠崖、儋耳の九郡としたと記してある。今の廣東廣西兩省の地から安南まで其版圖に歸したのである。之を日南といふたのは、唐顔師古の注した通り、言其在日之南、所謂開北戸向日者で、夏至には太陽が北緯二十三度半に達するから、其地は太陽よりも南にあるといふのでこの名を得た。水經註には區粟建八尺表、日影度南八寸、自此影以南在日之南故以名郡。望北辰星、落在天際。日在北、故開北戸以向日此其大較也と出てる、日南の意愈明である。かくて今日の安南が外國への交通の要衝になつた。ことに西域から海路支那に達した人々は、まづ日南 *lit. nan* を、ふりだしに廣東につく。そこでこのジーナンから漢の地をシナ支那と呼ぶやうになつたともいはれる。後漢桓帝延熹九年(西曆一六六)大秦王安敦の使も亦日南徼外より使を遣はして象牙、犀角、瑠瑯を獻じたと記され、西洋の支那に通ずる一門戸となつたことは、實に古くして久しかつた。

徐聞 漢の元鼎六年の開置で、合浦郡治の所在地である。今も廣東省雷州半島の南陽に徐聞縣がある、その縣治の開港場を海安所といふ。海安灣は瓊州海峡に臨み、對岸は海南島(朱崖、儋耳)の瓊州である。こゝが外船の要地であつたことは、宋會要(粵海關誌所引)に南宋の孝宗乾道九年(西曆一一七三)瓊州に市舶官一員を置き、市舶の覺察を掌

らしめんとしたことがあつたことによつても證される。

合浦 合浦縣は合浦郡のうちの一縣で地理誌に有_レ關。莽日桓亭とも出てゐる。關は海外交通上の關津である。今廣東省欽廉道に屬し、唐時廉州の治があつた。現在は合浦といひ、東京地方への要港である。籌海圖編によると永樂七年(西曆一四〇九)冬十月倭酋_レ廉州_レ教授王翰死_レとある、後小松天皇の御世に倭人は既にこの地方に進航してゐた。

都元國 賈耽の道里記では海道は象石即ち徐聞附近から西南三日にして占不勞山(環王國、安南)に至るとある。しかるに地理誌はさうした安南を無視して、都元まで五月航程だと記すので、都元をすつと南方の馬來海峽あたりに持つてゆく可能性がある。そこで藤田豊八博士は東西交通史の研究で通典一八八卷の邊斗の條(再述)にある邊斗班斗一云_レ都元國_レ 拘利九離_レなどいふ國が、いづれも馬來半島の南端であり、ことに都元は好糶香、藿香、及流黃を出す土地で藿香といふのは大木の根の土中に朽敗した残りの中節である、つまり沈香であるといふやうな記事があるので、この漢書の都元は實に通典の都元又は都軍であるとし漢書地理誌は都元からさき緬甸、印度への航路を記したものであるとの見解をたてられたのである。

思ふにこの通典の記事は梁書卷五十四扶南傳にも出てゐるもので扶南は在_二日南郡南、海西大灣中_一、去_二日南_一可_レ七千里。在_二林邑西南三千餘里_一とある。通典によれば、真臘(Cambodia)赤土(暹羅)等がその別種又屬地である。又唐書列傳には扶南在_二日南之南七十里_一、地卑窪與_二環王_一(安南)同俗、其人黑身髮、保行、とあつて、今の交趾支那東浦塞にあたるのである。しかし其以前は今の交趾支那から暹羅へかけての大國であつた。故に梁書にも其國輪廣三千餘里

土地洿下にして平博。氣候風俗大較林邑と同じと記されてゐるのであるが、管ては馬來半島までがその屬地であつたと見え、梁書に其王蔓は自ら扶南大王と號す、乃ち大船を作り、漲海を窮め、屈都昆(通典の都昆?)、九稚(乃ち九離)典孫(乃ち頓遜)等十餘國を攻め地を開くこと五六千里、當に金隣國を伐たんとして、疾に遇ふとあるのである。

金鄰は太平御覽卷七九〇にも見え、異物誌曰一に金陳とある、康熙字典には金隣と記し交趾の地名としてゐる。Chin Lien 又はキンリンの音は崑崙に近いので、或は交趾の崑崙島をさしてゐるかもしれないが、義淨の南海寄歸内法傳解纒鈔の著者慈雲尊者の考では金鄰は金州であるとして珊迤移の語をひき、(今案此應ニ室利佛逝ニ梵名 Crithodia の譯で唐以後三佛齋といひ、スマタラの Palembang である)ちつして

彼洲又名ニ末羅遊(Malayu)語勢有ニ金義ニ求法傳下三藏俱ニ貞固ニ再往ニ室利佛逝。詩に「爲ニ我良伴 共屆ニ金州」とあるは是歟。

とのべてゐるのである。蓋し慈雲尊者は金鄰を金の出る土地と解した。桑原博士の「蒲壽庚の事蹟」にも慧超傳に「波斯人向ニ師子國(セイロン島)取ニ諸寶物、亦向ニ崑崙國取ニ金云々とある語から、金の産地即ち梵語の Souvarna-dvīpa は崑崙である、南海諸國は古くから黄金の産地で、義淨の金洲もスマタラであるが、馬來半島又は爪哇いづれも共に黄金の産地であるから、崑崙は南海に屬するとのべられてゐる。(蒲壽庚の事蹟 七八頁)

しかし義淨が金州をスマタラに擬した際には、崑崙までも金の島とは考へてゐなかつた、末羅遊に金の義はあるが掘倫洲(Kulūm)掘倫、崑崙は馬來族之總稱也とのべてクロン又はコンロンは、「舊唐書」の南蠻傳に林邑以南卷髮黑

身通號_ニ崑崙_一といふ解に従つてゐる。思ふにこの兩説から前にも述べたやうにコンロンの音から金鄰の字が出ると考へうることを暗示する。従つて崑崙は交趾の崑崙島 (pulo-Condore) でもあり、又馬來族の總稱でもある。或は又之を金の産地としての馬來半島やスマタラに擬する所の金州の名も出たものであらうと信ずる。後に金鄰、大灣の名があるが、それも崑崙から馬來南端に達する南支那の大海だと考定される理由ともなるであらう。前述の漲海即ちこの大海である。

従つて扶南大王蔓が征討せんとしたのは馬來半島から或は交趾の崑崙即ち康瀾字典の金隣に向はんとしたのかもしれないが距離と方向がちかうから、實際は義淨の金鄰即ちスマタラに向はんとしたものであらう。少くとも馬來半島及其附近の崑崙族を征討したことは疑ふべくもないのである。

同時に屈都、九稚、典孫いづれも漲海に接する十餘國の一であるから、馬來半島附屬の國であることは確實である。「南海寄歸傳」にも獅子州の外に南海諸州十餘國ありと出てゐる。義淨は西曆六七一、唐代天竺に赴く、王蔓はその以前であるから、この屈都、九稚等の名も亦十餘國として夙に海上の航海者に知られてゐたものであつた。故に藤田博士は漢書の都元を案じてこれをこの屈都毘である、即ち霍香の産地であるとされた。故に都元は馬來半島の尖端に近く、やがてそれから船行四月の長途にある邑盧没を考説し、新唐書、南蠻傳にある盤々國東南の拘婁密であらうと斷じ、其方向は都元から西北である所の緬甸近くに、この邑盧没をおき、つぎに誥離は賈耽の道里記中の驃國の悉利城であらう。悉利は安南の西、湄江を渡つて約一千百里であるから當然緬甸の地であり、それから夫甘都盧まで歩

行十餘日にして達するといふのは、夫甘即ち蒲甘である (Rockhill 著趙汝适にも pagan on the Irrawadi) 即ち今の Pegu を言すものと斷じ、王莽の時の皮宗は馬來半島の Pisang であると論斷された。いかにも之を承認しなくてはならぬやうにその論鋒は鋭いのである。

しかし筆者は博士の所説をみても都元を都昆又は犀都昆といふ馬來の半島先端の國と同一視することが出来ない。

第一にその音韻が一致しないと思ふからであるが、拘婁密に至つては別に異説がたつ。蓋しこの地は唐書盤盤傳に左の如く記されてゐる所である。

盤盤在南海曲、北距環王。限少海與狼牙脩接。自交州海行四十日乃至。(中畧)其東南有哥羅、一曰箇羅、亦曰哥羅富沙羅、王姓矢利波羅、名米矢鉢羅。中略、東南有拘婁密、海行一月至。南距婆利(Bali)行十日至。東距不述(Position 島)行五日至。西北距文單行六日至、云々。

とあるのである、こゝで云ふ拘婁密(Kou Lou Mi)といふ語を(クロミ又はクロム)即ち崑崙とか、金鄰とかいふ語に同じものだと考へ、之を上述べた金州とみて或はスマタラに擬する可能はあるが、後述する通り哥羅富沙羅は利瑪竇の坤輿全圖にさへ滿刺加だとするしてゐるので、馬來半島に定まるべきであるから、この哥羅の國を中心として右の文を見直さなくてはならぬ、即ちクルミは實は後の世の吉里闐である、即ち Karimou Java Is. ではないか。さうして、そこは哥羅から東南一月の海行の地であつて、婆利や不述に近く、馬來半島の南端に近い土地であるらしい。果して然らば藤田博士の所説の半島南端の都昆即ち都元から、海行四月といふ距離に合しなくなるではないか。

即ちこの文によれば拘婭密は後の吉里門であり、(Karimon) そこから十日南行して婆利 (Bali 爪哇の東)。東行五日にして不述 (pu Shu) は日本語でブジツは恐らく——Postillon 島のボスチの譯である)。西行五日の文單は爪哇の Bantam ではないか、唐書列傳には陸真臘を文單と記し Rockhill の趙汝适にも文單を以て真臘の一州であると説くけれども、この唐書の盤盤傳の最終に示した文字は拘婭密からの位置をしめすものであるから、爪哇の一洲とみる方が地理に合する。猶スマタラ海峽中に大カリモン (great Karimon) があるが、(吉里門) この方も亦地理が合しない。従つて漢書地理誌の邑盧没を、哥羅富沙羅の東南(勿論盤々の東南ではない)にある拘婭密即ち予の Karimon に擬するならば、まづ都昆(馬來南端)にゆき爪哇に近づき、それから誹離國まで僅かに二十餘日、それから又步行十餘日で緬甸のベグにつくといふことになる。同時にこの間に步行などの出来る陸の障害はないことにもなり全く地圖の上に於て想定の出來ない道里記に墮するのである、元來道里記なるものは近より遠に及ぶものであるから、合浦から直ちに馬來半島南端に行くやうな記述はないと見るべきではないか。恐らく合浦を出た舟は沿岸に沿ふて佛領印度支那の海岸を下り、都元から邑盧没、それから船行誹離につき、やがて陸上歩行をつゞけて夫甘都盧に出たものであらうから、こゝでは馬來半島の南端の都昆とか爪哇に近い拘婭密などに行つたと考へてはいけなないと思はれる。

それよりもこゝでは暹羅灣の西、即ち金鄰大灣に臨むマレイ半島の東岸から、西に越える地峽を考へるべきで、ここに步行十日といふ文字を生かすべきである。地峽としてはこゝにクラ地峽とも一つ Ithunus von Ligor (リゴル地峽) があつて、その南に馬來聯邦の本部がある。そこで筆者はこの地峽の哥羅といふ古名を考へ、又都元其他の地

名を考説し、夫甘都盧の必ずや半島西岸にあるべきを斷言し藤田博士の所説から離れてみることにする。

ここで、一應盤盤國について考をまとめる。

唐書盤盤傳によると、盤々は在_二南海曲_一北距_二環王_一。限_二少海_一與_二狼牙脩_一接。自交州海行四十日乃至。

とある。句讀點を王字の下にとれば、唐書に環王本林邑也一曰_二占不勞_一といふ文に従つて、盤々は北の林邑と陸續となるが、もし少海の下に句讀點をとれば環王國と盤々との間に少海があつて、狼牙脩に接することになる。杜預の通典は梁書によつて(太平御覽)、盤盤國在_二南海大州中_一。北與_二林邑_一隔_二少海_一。自交州航行四十日至としるした、しかしこれでは地理に合しない、南海、大洲といふものが不明な存在であるからである、唐書はさうでなく、盤盤は南海の曲即ち暹羅灣への曲り角にあつて北は環王國(林邑、安南)を距つてあるから陸は續である。さうして少海を隔て、狼牙脩と接すとある、故に盤々と狼牙脩との間に小海(暹羅灣)の灣入があると同時に、陸もつゞるてると解しなくてはならない。従つて通典の文や梁書とは全く違つてくる、これは唐書の方が正しいと思ふ。

蓋し狼牙脩は南海寄歸内法傳解纜抄に慈雲尊者が明にしたやうに、土番(今の西藏)の南にあたる東裔諸國のうちであつて注して、

傳云、蜀川西南行、可一月餘、便達_二斯嶺_一(大黒山、印度の那爛陀より東行すれば五百驛、皆東裔と名づくその盡窮に至つて大黒山がある)次斯南畔迢_二近海涯_一。有_二室利察咀羅國_一(Sri-Ksetra)次東南有_二耶迦戌國_一(Tamkasu)次東有_二杜和鉢底國_一(Dvarapatti 暹羅の古都名)次東極至_二臨邑國_一(林邑即ち安南)

とあるではないか、四川から印度の那爛陀寺(Nalanda)即ち施無厭で、王舍城北方七哩にあり、曠多王朝帝日王の創建にかゝり印度佛教の中心地である)までの五百驛のうち支那と印度との境に雲山南脚の大黒山がある、馬來山脈の根幹である。するとこの印度支那山脈の南に於て、海涯に逼近して室利察咀羅國あり、その東南に郎迦戎國がある、Lankasu は Nankasi 又 Dhanacri であつて今日半島の附け根の Tenasserim である。又その東に暹羅があり、更に東に臨邑(林邑)がある。そこで慈雲尊者は義淨の記す所の、

驪州(瓊州)正南步行可餘半月。若乘船、纔五六潮、即到_レ景(恐今 Hue)南至_レ占波(即是臨邑)。

とあるのにも注し、占波、膽波、臨邑、林邑皆同と斷じたのである。さうして郎迦戎國に注して梁書狼牙脩、諸蕃誌の凌牙斯加、烏夷誌略の龍牙犀角、皆同。とのべた、故にこの狼牙脩國は暹羅の西で馬來山脈を負ふた海岸の國である。そこで地圖を案ずれば盤々はどうしても林邑の南で南海の曲にあたる、即ち今の東藩塞附近で、小海をへだて、狼牙脩即ち馬來山脈に近い國に對するのである。

轉じて隋書、赤土傳(暹羅)をみると、

狼牙脩は隋書赤土傳にある通り煬帝の大業三年(西曆六〇七)屯田主事常駿、虞部主事王君政等が使した際、其年十月南海郡(廣東)から乗舟し、晝夜二旬、每值便風至_レ焦石山。而過_レ東南、泊_レ陵伽鉢拔多洲(西與_レ林邑相對)。上有_レ祠、神焉。又南行至_レ獅子石、自是島嶼連接。又行二三日西望見狼牙須國之山、就_レ是南達_レ雞籠島(至_レ於赤土之界)と記されてゐるではないか。思ふに陵伽鉢拔多州は同じ隋書列傳、眞臘傳にも近都有_レ陵伽鉢婆(Linga parvata)山上

有^ニ神詞^トといふもので、林邑の東とある。故に舊環王國の東にある *Kurao Rai* 島であつて賈耽道里記の陵山に當る。従つて獅子石は交趾支那の南端にあるべきで、*Rockhill* の趙汝适に於いて *pulo Sapatu or puloecir de Mer?* として安南東南の岩礁とした、いづれも北緯十度東經百十度の海上にあるものである。獅子 *Shih-Shi* の音がセシルに合するから恐らくセシル・ド・メル^ドの岩礁であらう。そこで針を西南にむけシヤム灣を横ぎると島嶼連接し馬來半島に近づいて狼牙脩國の山が見えるのである。續高僧傳、眞諦傳には梭伽修ともあるが *Lankasuka* は今もクラ地峽に近し、*Lang Suan* 驛に其名をのこしてゐる。故に獅子石セシル・ド・メルから西に暹羅灣を横ぎつてクラ地峽又はリゴル地峽に近づき、地峽の北に高く聳えた *Khaw Lwang* (コールアン) 四三二〇米を望見して、やゝ南下すると、地峽の南にも亦 *Kao-Luang* (五八一四米) の高山がある、この兩高山いづれもコールアン又はコーランで、雞籠(キールン)の音に近い。百萬分一東亞輿地圖をみると、東徑百〇一度北緯八度半に *Kra* 島がある。一七四七年版 *Bowen* の東印度地圖にも、シヤム灣内に *Kara* 島が記されて *Ligor* 島(今 *Kaw Yai*) の東にあたる。リゴルは六昆國で我山田長政の居城の故地である。蓋しクラ又はコーラの地名は非常に廣く北はクラ地峽から今の暹羅領半島部を總稱してゐるのである。故に隋書の雞籠も恐らくこのクラ島又はリゴル島をさしてゐるのではないかと思ふ。

故に拘婁密を盤々の東南だから緬甸だといふ議論はどうも落付かない。もし博士の云はれる通り、まづ都元につき(馬來半島南端)それから拘婁密にゆくとしても、盤々は南海の曲、環王の南、だからつまり交趾支那である、故に拘婁密を、遠くその西方のビルマに持つてゆく事は方向を失するであらうと考へられる、拘婁密は實に邑沒慮ではない。一

歩を譲つて猛吉蔑のクメルだとしても、これを暹羅よりも遠い雞籠又は哥羅の東南に持つてゆく必要はない。新唐書に眞臘、一曰吉蔑、本扶南屬國とある位だから、吉蔑は東蒲塞であつて、斷じてビルマではない。蓋し盤々といふのがどこであるかによつて、この問題はきまるのであるが、盤盤は北環王をへだつとある、同時代の記録南海寄歸傳によれば、唐代安南の南に占波があつて、それが臨邑であつた、されば臨邑と盤々とは近接の國であるべきである、臨邑の隣に眞臘即ち東蒲塞がある。

宋史卷四八九の列傳には

眞臘國亦名占臘。其國在占城之南（林邑の南）、東接海、西接蒲甘南抵加羅希（カルフ、哥羅）、其屬邑有眞里富在西南隅。東南接波斯蘭、西南與登流眉爲隣。

とある。思ふにこの眞臘即ち今の東蒲塞から暹羅へかけての大國に、盤々といふも一つの地名があつたのではなかつたか。

新唐書によれば眞臘は一に吉蔑であり、本は扶南であつた、そこで再び梁書の扶南傳を見ると、林邑の西南の國とあつて、其南に頓遜國（典孫、馬來半島の一國後述）がある、其山は金を出す、しかもその金は石上に露生して限る所無しといふ傳説さへしるしてあつて、黄金の國は扶南だといふことに考へた時代もあつたらしい。それが後には馬來半島からやがてスマタラが金州となり、最後には日本の東の金銀兩島にうつつたのである。蓋し其の根元は過去に於けるアラビヤ人や印度人が、馬來半島から東方へ航し來つた船人仲間の夢物語であつたのである。

そこで、その扶南即ち暹羅について梁書列傳に曰く、

扶南國俗本裸、文身、被髮、不制衣裳。以女人爲王號曰柳葉。其南有徼國、有鬼神者字混盤。遂乘船入扶南、治其國、納柳葉爲妻、生子分王七邑。其後王混盤況、并諸邑、盤況年九十餘乃死、立中子盤盤、以國事委其大將范蔓、盤盤立三年死、國人共舉蔓爲王。

といふ傳説神話がある。故に扶南國では始祖を盤況とし次が盤々(pan-pan)で、その次も亦范蔓(Fan-Man)殆ど類似の發音の王名がついてゐるではないか、恐らくはこの二代の王の稱呼と盤々に關係があるから、扶南の國都を盤盤と呼ぶやうになつたのではないか、従つて盤々と扶南は同じ國名である、このことは同じ梁書扶南傳中に神話として王橋陳如に關しても記されてゐる、曰く王橋陳如はもと天竺の婆羅門である、東晉穆帝の升平元年(西曆三五七)の後で宋文帝(西曆四二四)以前、支那では五胡十六國の時代のことであるが、

有神語曰應王扶南。橋陳如心悅、南至盤盤、扶南人聞之舉國欣戴、迎而立焉。

と記されてゐる。つまり開國の柳葉や盤々は確實な年代は明でないが、西曆第四世紀に下ると天竺の婆羅門が神語によつて來つて盤々に入るや扶南王となつたとあるのだから、當時は盤々といつても、扶南といつても同じことであつたのであらう。

果して然らば盤盤は即ち扶南であり、眞臘である、さうしてその建國に近い盤盤王の時代から范蔓王、それは通典に吳晉の時代とある。我紀元では應神天皇の御代、西曆第三世紀頃には、漲海を窮め屨都昆等十餘國を收め、其領土

は馬來半島を掩有したものだといへるのではないか、而して第四世紀にもなると盤盤の王系は亡んで新たに天竺の婆羅門が入都して王となるに至つて、屈都昆や典遜等の馬來半島諸國とは別々の國になつたものであらう。こゝに於て扶南と盤々の二つの國名が支那人に記録されることになつて混雜を來したものと考へる。従つて南海寄歸内法傳の南海諸州十餘國のうちの益々州のごときも、やはりこの盤々であらうか。慈雲尊者は益々洲を求法傳、曇潤條、訶陵北渤益國即勃泥東南岸 Tana Bumbun に擬定された。訶陵は賈耽の道里記にも出てゐる爪哇であるから渤益は或はポルネオであつて通典の敦焚洲であらう、抱朴子の所謂敦焚州(勃に同じ音 Do 焚は音 Fen)在南海中薰緣、水膠所出であるが、音は益 Pon と盤 Pan と類似ではあるけれども、渤益を直ちに益々と同一視は出來ないと思ふがどうであらうか。

盤々が扶南で臨邑に近い東蒲塞であることは、唐書盤々傳に、其臣曰敦郎索濫、曰崑崙帝也、曰崑崙勃和。亦曰古龍、古龍者崑崙聲近耳とあつて、臣下に崑崙の姓が多いが、同じ扶南傳には、扶南在日南(即ち林邑)之南七十里地卑窪。與環王同俗。王姓古龍とある、即ちこゝでは盤々の臣の姓が扶南の王の姓であるではないか。古龍の姓は其後永續して近くは一七七八年安南王に嘉龍の名もあつた位である。

かやうに盤々即扶南で臨邑(林邑)の南だとすれば眞臘にあたる、従つて盤々の東南に於て哥羅(馬來)からさらに遠い拘婁密はない、拘婁密を邑盧沒に擬するのはよろしくないかと考定する。

故に筆者は藤田博士の説に従はず、都元をすつと近い安南境中に求め、航程の五月とか四月といふものを五日又は

四日と云ふ書き誤であらうと考へ、さうして道里記はこゝでは安南を記すべきであると信じて其地を物色することにした。

地理誌に都元は徐聞から五月航程とある、徐聞と合浦は其間凡四百支那里もある、出發地で遠近の差があるのを無視する位であるから五月といふのを不精密であると考へる、合浦から順風でゆく所は唐代には占不勞であつた。都元(Tu yuan)はツゲン又はツーヤンである、それは今日の占不勞の「ouran」に近い、日本人のトロンカ嵩と呼ぶ所で唐時象石から順風三日でゆくことの出來た所であつた、今日でもそのツーラーヌの附近に明にタンケといふ村があつて東西輿地圖にのつてゐる。都元は或はこのタンケに近い地名の漢譯であつたであらう、東經百〇八度北緯十六度七分に近い。

邑盧沒國 今日の北京音で Hlu-Mo (イルモ) である、しかし邑の音は乙及切音迄、緝韻であると同時に遏合切音始、合韻でもある、合は邦音で加行である、故にイルモでなく、クルモ、又はコーモと訛つて後の世の吉蔑と同じものだと考へられる。勿論拘婁密もカリモンの音でなくて「コーモ」の寫だとするならば、邑盧沒も拘婁密も共に後の世の吉蔑であるといへる。

しかし前述した地理の上から見ると盤々即ち吉蔑であるから、唐書盤々傳にある哥羅東南の拘婁密は同じ發音だとしてもこゝに述ふる吉蔑ではない。

唐書列傳に、

眞臘一曰_三吉婁_二本扶南屬國東距_三車渠_一、西屬_三驃_二、南濱_三海_一、東北抵_三驪州_二(中略)貞觀初并_三扶南_一有_三其地_一。
隋書列傳には

眞臘在_三林邑西南_一(驪州即_三林邑_一)本扶南之屬國也、去_三日南郡_一舟行六十日而南接_三車渠國_一西在_三朱江國_一其王姓利利。名質多斯那。遼象_三扶南_一而有_三之_一。子伊奢那先代立。居_三伊奢那城_一郭下_三二萬餘家_一、城中有_三一大堂_一是王聽_三政之所_一。とある。伊奢那はクメル王 Jayavarman IV の遷都した昔の Cok. Gargyar であつたであらうか、有名な Angkor-Thom に近く。車渠は今の音 Chu-chü であるが、我邦では貝の名、車渠を謝古_{シヤコ}と發音する。蓋し車渠は南海の産で、或は地名車渠からの名であるかもしれない。恐らく交趾支那の西海岸に近いチャクコエ山などといふ地名は其の名残でもあらうか。朱江國は驃國で唐書列傳朱波と記してゐる。永昌故郡の南二千餘里に位し、東眞臘に隣り、西、接_三東天竺_一南は瀕海に盡き北は南詔に通ずとあるから、今の緬甸である。故にこの眞臘は安南の西、今の暹羅であるが、これを吉婁といふのは Khmer 又は Komar と呼んだからである。このコメル、又はクメールから Cambodia の名も出たのである。

航行四ヶ月とあるが、隋時日南郡から六十日の舟行の地であつた。思ふに都元を出てから、クメル即ち眞臘の南端附近についたことであらう、六十日が四ヶ月とあつても過大ではない。但しクメルと讀むよりもコロムと讀んで崑崙のクロンと同じ古語を寫したものだとするれば、クメルの南にある崑崙島にあたる、即ち今の pulo Condore 即ち崑盧沒(クロム)である。崑崙から更に西して暹羅灣に入ると、その北方は眞臘、即ち、扶南であり又の名盤々である。

諶離國 諶音士林反シン又は Sheh であるから、シンリ又はセンリ、或はシンロである、眞臘といふ漢譯とひとしい地名である。武備誌には占臘(シヤムロ)と記されてゐる、これをシヤムロと讀めば今の暹羅(シヤムロ)と同じ漢譯である。邑盧沒から諶離への航行二十日は恐らく交趾支那即ち車渠の南端を迂回し、或は崑崙島(邑盧沒)をへて暹羅灣の西岸に向つたものである、勿論驛國の悉利城などへ進んだわけではない。

步行十餘日 この記事は舟にのつて行つたものが、こゝで舟にのりかへるといふ歴史的事實を語るものである。同時にある海から他の海へ步行十餘日にして出られるといふ地理を無視しては記されない、従つてこゝに何か地峽の狭い陸地があつて、一方の大海即ち東支那の大海(漲海)から、西の方の大海をさへぎつてゐるといふ地形を考慮せなくてはならない。

諶離を暹羅となし、夫甘都盧の夫甘を假りに蒲甘即ちイラワデイ河にのぞめる所の Pagan 即ちラングーンに近い Pagan であつたとすれば、その陸行の地は馬來半島のつけ根であるクラ地峽あたり、シヤム灣とベンガル灣との連絡にあたる所ではなくてはならぬ、處がクラは前述した通り広い名であつて、クラ地峽に近い Kora からリゴルまでに廣布する。故に哥羅、簡羅、又は哥羅富沙羅を狭い一つの市とは見ることが出来ない。通典哥羅の條に曰く、

哥羅國漢時聞焉、在盤盤東南亦曰哥羅富沙羅國、累石爲之城、有接闕門、有梵衛、宮室覆之以草。國有二十四州、而無縣、出古貝布(注。通典に哥羅會分とあるは哥羅富沙羅と)

と出てゐる。或はこの哥羅富沙羅あたりに、この夫甘都盧を求めべきではないか、もしさうだとすれば陸行十日

に適合する。宋史第四百八十九卷刻傳注鞏國それは Rockhill の「趙汝适」によれば南印度のコロマンデル海岸の Chola であるが、そこから支那へ航海する古老の傳として注鞏から古羅國をへて東にくるとあるところである。従つて東から暹羅灣を横ぎつても亦當然こゝにくる。即ち哥羅又は雞籠島につくのである。但し唐書の盤盤傳に箇羅の東南有^ニ拘婁密^トとあるのは、上述した通り吉蔑の邑盧没ではなく、後の世の吉里闍(Karimon Javals)である。唐書に拘婁密、海行一月至。南距^ニ婆利^トとある、即ちクラから一月で吉里闍に達する。南にバリ(Bali)を距つと記されてゐるのが其確證である。バリは爪哇の東であり吉里闍は爪哇の北に位して近い。さうして文單は今の爪哇の Bantam であらうからである。

そこで利瑪竇の坤輿萬國全圖にあたつてみると、滿刺加、古、哥羅富沙とあるではないか、果して然らばクラ又は哥羅、箇羅は實は馬來半島全部にも及ぶ所の汎稱である、さうしてマラッカから吉里闍への航路が餘程古くから開けてゐたことは後述する通りである、蓋し明時、哥羅を滿刺加と認めたことは學者の通説であつたらしい。明史卷三二五滿刺加傳に曰く、

滿刺加在^ニ古城南。順風八日、至龍牙門(Linga)又西行二月即至、或云、即古頓遜、唐、哥羅富沙と。

東西洋考には
麻六甲即滿刺加也(Malacca)古稱^ニ哥羅富沙^ト漢時既通^ニ中國^ト後頓遜(今の dinding)起。自^ニ扶南^ト三千餘里皆屬^レ之、其東界通^ニ交州^ト(廣東)、即哥羅富沙地也。唐永徽中以^ニ五色鸚鵡^ト來獻、唐書曰哥羅一曰箇羅、亦曰哥羅富沙羅、王姓失利婆羅名米失鉢羅舊隸^ニ暹

羅、……永樂三年曾、西利八兒速刺遣使上表、七 years 上命_ニ中使鄭和_一封爲_ニ滿刺加國王_一。從_レ此_レ不_レ復_レ隸_ニ暹羅_一。矣

とあるではないか。果して然らば哥羅富沙羅又は箇羅は馬來半島の國であつて、漢代に哥羅は暹羅の領土として半島全部に擴がり、(扶南)後に頓遜に服從した市であつた、轉じて、通典の頓遜をみると

頓遜國、梁時間焉_一曰、在_ニ海崎山上_一(山上、島上の意で *dinding*) 地方千里、王並屬_ニ扶南_一。北去_ニ扶南_一可_ニ三千餘里、

其國之東界通_ニ交州_一(_{廣東に通すること}) 其西界接_ニ天竺_一安息徼外諸國賈人、多至_ニ其國_一市焉。所_ニ以_一然、頓遜廻入_ニ海

中二千餘里、漲海無涯、岸舶未_レ會得_ニ逕過_一也、其市東西交會日有_ニ萬餘人_一珍物寶貨無_レ種不_レ有_ニ云々_一。

とあるではないか、蓋し張紹和の見解に従へば滿刺加は古への哥羅であり、それが通典の頓遜である。處が通典の頓遜は海崎山上にある要港の名であるけれども、哥羅は大きい國名であるから、頓遜といへば港の名となる。しかし舟で行けば同じ所で所謂唐書の哥羅富沙羅も亦扶南から三千里、東は交州に通じ、西は天竺に向ふところで、安息徼外の大食人或は天竺の人などが、この國に集まつてくる所である。其理由は馬來半島が一千餘里漲海に突出してゐるので、この半島の迂回が困難であるから、自から東西交會の市となつた、日々萬餘の人が會して珍物寶貨、種有らざるはないといふのである。

果して然らば漢時講離、(シヤム)を出た舟行の人は、恐らくこの馬來半島の東岸につき、それから歩行して夫甘都盧即ち通典の頓遜に當るやうな所で市をすまし、さうして東歸するといふ例があつたものであらう。さうして頓遜は恐らく今の *dinding* でマラッカ海峽の要港である。東經百度北緯四度半に近い島であつて、今日では其北方北緯五

度に近い彼南 (penang) が、マラッカ海峡の北門として要港の位置を奪つてゐるけれども、昔の人がこの海峡に来て
哥羅富沙のマラッカとか、後には dinding に市を建てたとは馬來半島の地理を按じて當然であつた。思ふに Kara
の地名がクラ地峽に残存してゐるのも、やはりこの半島の故稱古國名として承認されると共に、明時マラッカをこの
哥羅に擬したことも、其商港の働きで自から首肯されるのである。

哥羅は後の本には故臨ともしるされる。

宋代淳熙五年(西曆一一七八)の作である、周去非の嶺外代答に故臨國とある、古林とも古邏ともかく。さうしてこ
の故臨は頓遜のやうに大食國の蕃客の寄居甚だ多い地であつた。

通典には哥羅王姓矢利婆羅、征伐皆乘象、出古貝布とあるが、代答卷二には、王身纏布出入、以布作軟兜或
乘象とのべ、

其國有大食國蕃客、寄居甚多。中國船舶欲往大食、必自故臨、易小舟而往。

と記し、又大食國之來也以小舟運而南行、至故臨國、易大舟而東行とのべてゐるのである。思ふにこの舟の乗り
かへといふこと、漢時步行可十餘日といふこととに歴史的のつながりはなかつたであらうか。

桑原博士は「蒲壽庚の事蹟」に於てこの文を引いて、南洋航路に於て古く故臨が船舶の足溜であることを注意され
てゐる。但し何故に舟をかへたかといふ理由は、支那船は形體重大にして波斯灣の航行に不便であるからだとのべら
れた、しかし、印度洋を航する船の大きかつたことは法顯の佛國記(西曆四一四)に明かで、彼は獅子國 (Ceylon) か

ら耶婆提 (Java) まで約二百人乗の商人大船にのつて歸つた位で、必しも支那の廣福船よりも小さいとはいへない。康泰の吳時外國傳、(太平御覽卷七七二)にも曰從加那調州(錫嶺?)乘大船。船張七帆。時風一月餘日。乃入大秦國也とあつて波斯灣には非常に大きい船があつたのである。

故に嶺外代答で小舟といひ大舟といふのは必しも妥當でなく、支那人の尊大な口癖で、外夷を小とし、本國を大としたに過ぎないであらう。従つて故臨で舟を易へるといふのは、實はそこへ大食人の寄居も多く、宛然大食人の市街であると同時に、支那人の古來こゝに至るものも多く、用事は大抵形がつく、故にお互に歸路に向ふたので、便宜上乗客が相互に乗り換へたものであらう……即ちこれは漢時からの習慣でないか。桑原博士は同書に於て西曆十世紀の半頃の Magoudi が、波斯の Basrah から大食船にのつてこの故臨、即 Killah に來たサマルカンドの商人のことを紹介した文をのせて(抄録)

キラは支那に至る(サラセン國より)半途よりも稍前方に位す、こゝはイスラム教徒の商船の集合地で支那より來る商船と會同する慣例である。されどその以前(唐末黃巢の内亂の發生せし頃まで)は然らざりき云々。

とのべ以前に支那の船は Oman 地方、Sraf の港、波斯及び Bahrein の沿海、乃至 Obollah, Basrah 等諸港に出かけるし、又此等地方の商船も、直接支那の諸港に通航せりと記してゐられる。故に博士の考では、大、小の舟にかへるのは唐末大亂の後の偶然の習慣であるといふ解釋である。しかしこれもやゝおかしい、何となれば唐時互に船を通したものである以上黃巢の亂位で、印度洋上に影響してそれが不通になるわけではないからである。由て思ふに、

これはさうした理由ではなく、實は漢時から梁時を通じて古稱哥羅富沙の地、後に頓遜に屬した土地に於て東西交會の年市が立つた。それが日に萬餘人も出會つた。そこで安息徼外の人も、支那の人も用が足つて、互に本國に歸つたことがかうしたマステイの記事にもなり、古代は王莽以前に歩行十餘日といふ記録をのこしたのではないか、つまり馬來半島の地形で廻入海中千餘里漲海無涯で逕過し得なかつた初期に於て、歩行十餘日といふことになつたのであると斷じる。従つて故臨、哥羅、滿刺加、頓遜すべてが馬來半島の西岸で海峽の要地であることに一致するのである、そこで夫甘都盧といふ地名をいかに解すべきであるか、上述した考證によつて、之を馬來半島の西岸でクラ地峽に近く認定してよいと思ふ。

夫甘都盧國 夫甘の二字だけをとれば藤田博士の蒲甘にあたる、即ち Pagan である。

宋史列傳卷四八九に

眞臘國亦名古臘、其國在古城之南（交趾支那）、東際海、西接蒲甘。南抵加羅希（カルフ）、哥羅である、其屬邑有眞里富、在西南隅。東南接波斯蘭、西南與登流眉爲隣

宋會要稿には嘉定九年、眞里富國在西南隅、東南接波斯蘭、西南與登流眉爲隣、欲至中國者、自眞國放洋五日抵波斯蘭、次崑崙洋經眞臘國、數日至賓達椰國。數日至古城界、云々とあるから眞臘の西、暹羅灣の沿岸であることは確定である。

Rockhill 氏は眞里富をメナム河下流に擬し波斯蘭を chantabun 登流眉を Ligor に擬した。

即ち眞臘は前述した今の柬埔寨から暹羅へかけての大國で、南は哥羅を併せ、馬來山脈をへだて、西に蒲甘國に境したのである。しかしたとへ謀離の西に蒲甘があつたとしても、夫甘都盧をば夫甘とは呼ばなかつた。何となれば唐時の人は之を夫甘と呼ばずして、都盧と呼んでゐるからである。唐の顔師古は都盧人は勁捷にして善く高に縁るとのべ都盧は種を尋ねとも記し、都盧人の升を究むることを特記してゐるのである。恐らく唐地へやつてきて今のサーカス風な登高の見せ物でもやつた演技者がゐたのであらう。そこで馬來半島の西岸で都盧(Telu)に近い地名を物色すると、一五二二年版の「Ptolemyの地理書」馬來半島圖に Tawla といふ地があるではないか。其位置を案じるとリゴル地峽の西にある所の Muang Trang (ムーアン、トラング、北緯七度二十分東緯百度) に近い。Andleyの地圖によるとムーアンはこの地方で「市」を意味する馬來語であつて、この名を冠する都會名は其數甚だ多い。

さうしてこのムーアン・トラン市は、今は馬來縱斷鐵道支線の起點で重要港である。同時にこゝにリゴル地峽を横斷する Klong Doang といふ河流がある、水路はやゝ不明であるが、東は其一支流暹羅灣に通じリゴル島に達し、西の一方の流れはベンガル灣に入つてゐるではないか、ともかく運河のやうに畫かれてゐてさうしてその河の西の方の河港が實にこのムーアン・トランである。恐らくこれこそ右の Tawla 即ち都盧であつて、昔時、支那の船はクラ即哥羅の島恐らくリゴル島に達し、このクロング・ドーアン河路に沿ふて、歩行十餘日にして都盧についたのではないか、夫甘の二字(Fu-Kan)は誤らへ Mu-Ang の轉訛であつて、市(Stadt)を意味する半島語であつたものであらうと斷する。

リゴル地峽のトラン市とかその南のベラク州のキラ（Kedah）もしくは頓遜、さては哥羅富沙羅のマラツカ。これらは古くからこの海峽に臨み、時代ごとに大食人や印度の商人の來り屯する所の年市の商港であつた。昔の船は帆船だから、季節風が船の進退を定める。宋會要稿に南洋の舟行について、（嘉定九年の條）

謂順風者。全在夏汛一季。南風可_レ到。若回國須_レ俟_ニ冬季_一北風_一捨_レ是則莫_ニ能致_ニ也。

とのべてゐる位で、夏に限つて來る。冬期でも北風が吹かぬと歸れない。我長崎でも外船の出入には定まつた時期があつた、自然これらの貿易港は當然年市的の性質を帯びる。そこで大食人や印度人がくる頃を知つて、冬期に出た支那や、爪哇や、眞臘や、東洋各方面の人々はこれをまちうけてゐるので自から東西交會の地となつた。アルプケルケが一五二一年マラツカを占領した時、既に、夙にこゝにスマトラ・ペグ・ジャヴァ、ゴールス（薩摩）及び支那の東端より來る外國商人あり、彼等はアルプケルケより貿易を許されたと報告された。蓋しマラツカは當時さうした年市商港であつて、即ち唐代の哥羅富沙羅であつた。漢書に夫甘都盧とあるのも、同様な商港であつたであらう、故にこれをムーアン・トランに擬定するのは、之を蒲甘 *Peu* とするよりも餘程妥當であると信じ、敢て博識の斧正を乞ふのである。そこで漢代に於てもトランから舟に乗れば、やがて印度大食に通じ得るのであつた。

黃支國 今の北京音では *Huang chi* であるけれども、黃は胡光切音皇で加行の音がある。大唐西域記の達羅毘茶國の都城建誌補羅 *Kanchi pura* のカンチではないか。プラは梵語で城にあたる、三藏法師傳にも建誌城爲印度南海之口、向_ニ僧伽羅國_一水路三日行程とある、僧伽羅は梵語 *Sinhala* で錫蘭であるから、カンチは今マドラスの南

Confeverum に近い所でなかつたかと思ふ。果して然らば支那へ印度人の交通は漢代にまで溯つて當然で、武帝より以來皆默見したことは確實であつた。王莽の時黃支から生犀牛を默じたとき、この舟はクラ地峽をへて陸行はしなかつた。全部水行して八月の航程で皮宗についたとある。

皮宗 といふ地名は采覽異言の正曹、ヒソウではない。漢音ヒソウ今の北京音で Pi Tsung であるが、通典邊防篇邊斗の條に、邊斗、都昆、拘利、比。嵩並隋時聞焉と出てゐる所の比嵩と同名であるらしい。蓋しこの四つは、扶南から金隣(昆崙クンロン)と同語なるべし)大灣を南行する三千里にして此の四國ありと記され、さうして其農作物は豈耨と同じく又沈香の名産地だとある。所でこのコンロンは前述した Pio-Condore であるから、扶南即ち今の佛領印度支那の南端からコンロン灣を南行三千里にしてこの比嵩等の四國があるわけである。故にこれらは地理を案じて馬來半島の南端に位するのである。

比嵩はヒスウで北京音 Pi Sung であるから、勿論皮宗と同音と見られる。轉じて武備誌の航海圖をみると、この馬來半島のマラッカ海峽中に毘宋嶼(Pi Sung)と記した島がある。右の邊斗、都昆等は明でないけれども、毘宋は明に隋時の比嵩であると考へられる。右の海圖はこの毘宋を要視して針路をしるしてゐる。即ち

毘宋嶼用已異針取吉利吉利門五更

とある、同圖を案すれば毘宋の南に吉利門がある。新嘉坡水道の西端に Great Karimoon とあるのに當る、但し「諸蕃誌」に吉里門山とあるのは、も一つ爪哇の北岸に存する Karimoon Java Is 或は pulo Krinnoon である。法顯の佛

國記の航路にあるとほり昔時印度の舟は、まづ爪哇に達し、それから廣東に向つたもので、武備誌にも後者を「吉利閩」と記してゐる、さうしてこの針路は龍牙門をも通ることになつてゐる。龍牙門は凌牙門ともかく、*Lingamon* で、今日シンガポールの南にある *Linga* 群島のことである。即ち明代に滿刺加から出た船は毘宋の南の海峽を東南に下り、吉里門の北をすぎ、シンガポールによらないで *Rhio* 群島と *Linga* リンガ群島との間を、東して吉利閩に達したのである。即ち毘宋は龍牙又は吉利門と共に重要な航路の要地であつたことは愈確實である。従つて拘婁密が古く記録された理由も明となるであらう。だから皮宗即ち比崙は、明代を通じ今日に至つても猶マラッカ海峽の要地であるから、(東經凡百〇三度十分、北緯一度二十八分)こゝに燈臺を置き *Pisang Is* ピサンといふ名が永續してゐるのである。(百萬分一、東亞輿地圖)

してみると、この毘宋嶼は漢時既に要地であつて、王莽の時こゝに黃支の船がよつたことがわかる、従つて隋時に比崙としてしられたことも當然であつた。

我等はかうした海峽の通路を、武備誌の海圖から判定すると共に、過去の航道を確めたが、黃支から、このヒソウに立ち寄らない場合には、陸行したものとして、リゴル地峽を越えたことを承認せざるを得ないのである。もし今後この地峽が開鑿されでもするならば、古の謎離、今の暹羅は、こゝに新嘉坡の位置を奪ひ、東西交通の要衝として、地峽部が再び復活するであらうことを信じる。

己程不國 王莽の時漢の譯使がこゝまで行つたといふのである、さうして其地は黃支の南にあるといふ、黃支を

Conjeeverum とすれば、更らに其南に於てこの地名があるべきであるが、武備誌の海圖をみると印度半島と錫蘭島の地圖がある。出來た時代が新しいから地名の明なものが多い。即ち撈葛刺は今 Bengal 州であり、烏里舍は今の Orissa である。さうしてこの二州の間に所屬不明の島があるが、これが明に地圖描寫の誤であることは其地名によつてしられる、即ち其一名保羅高岸とあるのは疑もなく Palk Strait でセイロンのバルク灣の對岸 point Calimere とセイロンの間の地名である。さうして右の海圖によると、波羅高岸の隣に折的希岸の名があるではないか。已は音 Chi 又は Si 程は ting 又は lei 不は Fon 又は Fu でシテイフとよめる。さうして折は音 Che 又は She 的は音 H 希は音 hi だから、これもセテイヒ或はシテイフとよめるであらう。してみるとこの岸はセイロン島と大陸をつなぐ Adam's Bridge に該當する。アダムス橋を何故にセテイフといつたかと考へるに恐らく、これは藤田豊八博士が東西交通史の研究(南海篇)に於てとかれたやうにセイロン島を斯調 Su-tiao 又は Si-cho と支那譯をした事に一致してゐるではないか。已程不即ち斯調ではないかと考へる。蓋し斯調は私訶條の簡稱である。セイロンの古稱では梵文俗語に寫して Shadipa といつた、雜譬喻經には「私訶壘」又は「私訶黎」とあるが、水經注や扶南記には私訶條とある。シハヂヤがて已程不即ち斯調ではないが、中世のアラビヤ人は Serendib といつた、dib は程不であり、dipa といふ。

果して然らば、武備誌海圖の折的希即ち漢書の已程不であつて、漢の譯使はセイロンに達して引きかへしたのである。この事は法顯の佛國記に於て、彼が歸路を師子國から耶波提にとつたのと符を一にするもので、恐らく紀元一世

紀に印度から日南への舟は達してゐたものであり、西紀四一四年に至つて、この漢使と同じ道を法顯がとつて青州(山東)に歸つたのである、恰も我紀元では允恭天皇の御世第三年であるが、それは高麗の廣開土王時代即ち、應神、仁德天皇の國威を韓半島に布かせられた時代であり、我邦からは半島は勿論、江南の吳に使者を送くらるゝこと頻々であつた時代である、してみると第一世紀以後第四世紀になつて、はじめて西は大食印度から中國に通ずるものあると共に、東からも、我國の多くの船が韓國や北支又は中支に通じたのである。蓋しこの時代が我國文化の黎明期であつたことは、之を輕々に看過してはならないと思ふ。

注記一 宋史第四百八十九卷注犖の古老の傳に曰く

離^ニ本國^ニ舟行七十七晝夜、歷^ニ那勿丹山、娑里西蘭山、至^ニ占賓國、又行六十一晝夜、歷^ニ伊麻羅里山、至^ニ古羅國。

Rockhill の趙汝道に那勿舟 Nautian から、娑里西蘭 Soli-Shan 即ち錫蘭につき、占賓(恐らくはベグワ)をへ、伊麻羅里山 (merqui 群島ならん) をすぎ古羅國に來たとのべてゐる。那は香那であるが、もし舟の音だとすれば chou 又はシウであつて、シウタン即ち已程不のシフの語に近い、セイロン島に附隨せる今の Tabba 島が即ち那勿丹ではないか、いづれにしても已程不はセイロンに近い、折的希だと考へる一助となるであらう。

附記二 漢時既に已程不、錫蘭島まで航路がひらけた、漢の舟も馬來を迂回し毘宋(皮宗)をへて黃支及び、已程不に往返したのであつたから、支那の水夫は夙にセイロンまでの海圖をもつたのである、故に武備志の海圖をみると、セイロン島までは全く針路圖(支那式海圖)であり、セイロンから西、ホルムズからアラビヤ海への海圖は北辰星や華蓋を注記して、天文觀測が記されてゐる全くアラビヤ人の海圖を得て、之を寫したことが明である。さきに筆者は何故にこの武備志の海圖が、錫蘭島に至つて一變するかを理會しなかつたが、漢時已程不に通じたことによつてこの疑問をとくことが出來た、即ち一證として之を附記する。

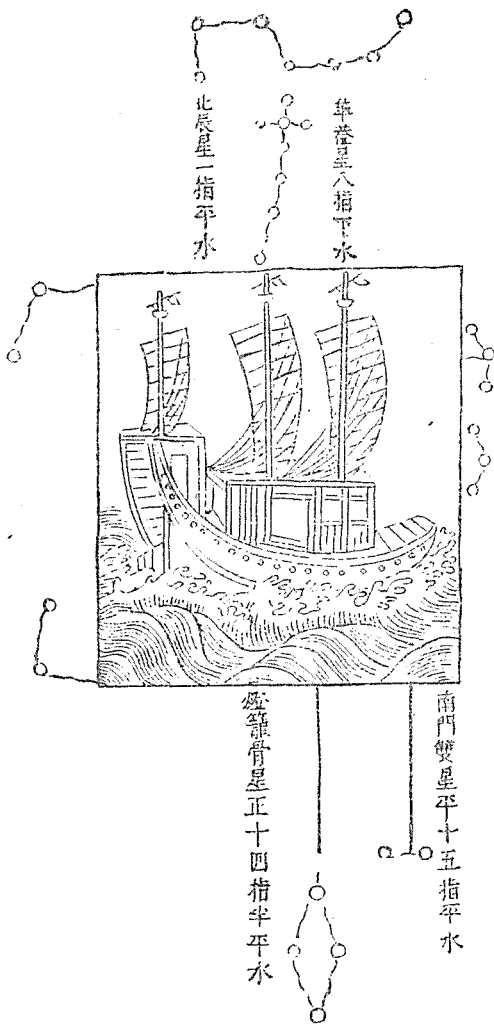
セイロン島よりスマタラへの過洋支那船の圖

錫蘭山回蘇門答刺過洋牽星圖

時月正剛 卯正星牽牽星八指北辰星一指燈籠骨星十四指半 南門雙星十五指

西北布司星四指爲母東北織女星十一指平兎山

東北織女星十一指平水



西北布司星四指平水

西南布司星四指平水

(武備志航海、天文觀測の圖)